

日本 戦闘者



荒谷卓（あらかたかし）
生年月日：昭和34年秋田県出身
略歴：昭和57年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職（1等陸佐）。
海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊—最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動かない力』三笠書房／『日本の特殊部隊をつくったふたりの“異端”自衛官—一人は何のために戦うのか！—』ワニプラス
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>



日本の戦闘者としての資質について話をします。先ず、第一に挙げる資質は「胆力」だ。心と身体の耐久力のようなものだ。身体の耐久力が向上すれば心の耐久力も伸びるし、心の耐久力が向上すれば身体の耐久力も向上する。心と身体の相互作用だよ。いくら身体の耐久力があっても心の耐久力が弱いと、すぐに心が折れて身体の耐久力は持ち腐れになる。心の耐久力ばかりでは身体がもたない。心と身体のバランスが大事なんだ。

最近「胆力」という言葉は古語のようになっちゃって、若いもんは意味が分からないようだ。しょうがないので外来語で言えば「レジリエンス」だろうか。しかし、「レジリエンス」の定義は使われ方によって様々だ。心理学では、「精神的回復力」「抵抗力」「復元力」「耐久力」として使われているようで、「脆弱性(vulnerability)」の反対の概念だ。心の自発的治癒力とも言う。精神医学では、ボナノ(Bonanno,G.)は「極度の不利な状況に直面しても、正常な平衡状態を維持することができる能力」としている。

性格的な特徴としての「レジリエンス因子」には、「自尊感情」「安定した愛着」から「ユーモアのセンス」「楽観主義」「支持的な人がそばにいてくれること」等を含む。日本の心理学者小塩真司氏は、レジリエンスは「新奇性追求」「感情調整」「肯定的な未来志向」の3因子で構成され、自尊心が高い者は、自尊心が低い者よりもレジリエンスが高いとしている。

レジリエンスそのものは誰にもあるが、活かせる人は限られる。自尊心・自己効力感・楽観性が高く、感情のコントロールができる必要があるということだ。

ここで言う自尊心とは、うぬづのよなものじゃないよ。西郷南洲翁(西郷隆盛の遺訓集)が言うところの「道を行う者は、天下拳(あげ)て誇(そし)るも足らずとせず、天下拳(あげ)て誉めるも足れり」とせざるは、自ら信ずるの厚き故なり」と言う感じだ。周りの皆から非難され

罵倒されても「間違っていない」と自信を持って言える人間。あるいは、周りの皆から褒められても「これではだめだ」と言える人間。つまり、自分の信ずることに対して周りがとやかく言おうが動じない心の持ち主ってことだ。俺が良く言う「大丈夫(ますらお)」の気概の持ち主がまさに「レジリエンス」を体現する人間そのものだ。

とはいっても、猪突猛進の頭の固い分ならず屋ではないよ。「レジリエンス」とは、「鋼のような強さ」ではなく、「柳のようにしなやかで決して折れない強さ」であり、「失敗や挫折をしても、その経験を糧に回復して成長する回復力」のことを示しているように、頑固で意地っ張りのような強さは、逆に長持ちしない。芯(信)を曲げずに周りの様子をよく見て、他者に合わせるところは合わせなくていいということだ。武道で言えば和(や)わら)だ。力対力の勝負で押し切るのではなく、相手の力や呼吸を自分の中心に呼び込み、自らはより安定化し、相手はいつの間にか安定を失って崩れるというものだ。

それから、失敗やリスクから逃げてばかりでは「レジリエンス」は発揮できないんだ。失敗を怖れて行動回避する癖を直し、失敗をして落ち込んだ気持ちから抜け出し、そこから目標に向かって前に進むことのできる力が「レジリエンス」だ。失敗したり、思い通りにならなくても、ネガティブ連鎖を断ち切って、失敗経験を「勉強のいい素材が見つかった!」と自己成長のためのプラス思考に換え、何でもかんでも教訓化してしまう。そうしているうちに、「どんな状況でも俺はできる!」という自信がわいてくる。さらには、ストレスを「肚(はら)に力が漲(みなぎ)る!」という感覚に変えることが出来たらばっちりだ。ここまで来れば、ストレスを餌に生きていく日本の戦闘者の仲間入りだ。

こんな感じでレジリエンスが高い人とは、一般的に言えば、「心が折れにくい人」で、「失敗しても試行錯誤として肯定的にとらえられる人」「失敗やストレスも含め常に自分が成長しているという感覚を持てる人」「周りが心配しても本人は常に楽観的であ



左が筆者。尖がっていた頃。

れる人」等をいうわけだ。

そもそも、戦の本質は意志と意志の対決であり、そこに強制力が働く戦闘になる。だから、戦の目的は、自己の意志を貫徹することであり、相手の意思を挫くことになる。戦に負けないためには意思が屈しないことが必要で、意思が屈しなければ死んでも負けない。だから、レジリエンスの高い人は強いわけだ。

例えば、俺が死んでも俺の意志を継承する者がいれば戦いは継続される。だから、意思を共有する集団があれば、個々の肉体は死んでも意志は生き続けるから、戦いに負けることはない。歴史的集団「日本人」の一人として、永遠に継承される日本精神の下、自分が決して負けない戦いをしているという自覚があれば、君のレジリエンスは必然強くなる。日本の戦闘者の強さはそこにある。

時代が変わって、武器が進化し、戦い方が変わっても、人間が戦う場合に不変の必須要件がある。それは、敵の攻撃に対する恐怖心を克服する力があるかどうかだ。それが「レジリエンス」、つまり「胆力」だ。恐怖心自体は危険を感じるセンサーだからなくてはならない。恐怖心が全く無くなったらリスク対応が出来なくなってしまう。しかし、それ以上に目的意志が強いことが大事なんだよ。自分の死以上に自分がなすべきことへの目的意志が強ければ、恐怖心を克服し、冷静な判断と適切な行動が可能になる。

戦力としての「胆力(レジリエンス)」を3つ挙げるとすると次のようなものだ。

①「どんな状況であれやらなくてはならない」という強い意志が有るか。任務遂行の可能性の問題ではなく、任務遂行の必要性の認識が絶対的に確立されてなくてはならない。できるかできないかではなく「やるしかねえ!」ってやつだ。

②「どんな相手とでも戦える」という自己の戦闘能力を体感できているか。勝つ

か負けるかではなく、「天誅(てんちゅう)!」って感じた。自分が死んでも守ろうとするものがあれば簡単だ。それを壊す奴は絶対に許さねえと決めることだ。自分が生き残ることを考えなければ、かなりのことが出来るぜ。

③「自分が行動することに意義がある」という役割意識を自覚しているか。家族や仲間との一体感、地元を愛する社会的一体感、日本人としての歴史的一体感等の中で、自分の生死を問わず皆のために果せる役割に満足できればメチャクチャ強くなる。「あとに続く者を信ずる!」と言って、残る家族や仲間そして日本人のため、花と散った英霊の死に対して俺たちが意義を持たせなくちゃな。

これが出来るようになるためには、「自分が大事」なんていう考えが障害になる。今の時代は個人主義が横行しているから、先ずそれを払拭しなくてはならねえ。そもそも、個人主義って言うのは欺瞞だらけだ。個人主義の主体は自分が「絶対的個人」と言うのが前提だが、「絶対的個人」なんて存在するはずがねえ。「絶対的個人」は、他の全ての存在と差別化され、あらゆる集団的分類に自分が属することを拒絶し、自己が唯一無二の独立した存在でなくてはならないとする。「あなたは誰ですか?」という質問に対して、「私は人間です」「私は男性です」「私は日本人です」等というのは、自分の属性を正しく示しているのだが、どれも絶対的個人としての自分は説明できていない。服や言葉や趣味や生活スタイルなどで流行を追っているやつは、その時点で個性を失っている。「私ってこんな人です」とか言って自分を第三者的に説明していても、結局、その個人の説明全てが何かへの属性でしか説明できない。つまり、人間のアイデンティティは個人的なものを除けばすべて正しくて正当であるわけだが、絶対的個人としての自分を説明しろ問われても不可能だ。ということ

は、人間はそもそも何かに帰属している存在で、絶対的個人なんて言うことはないということだ。それにもかかわらず、無理やり他人と自分を差別し、歴史と自分を切り離して刹那の人生に落とし込み、自分が、家族としての一員で日本人としての一員であるという集団性を否定し、私有財産と自己権利の主張に明け暮れて死んでいく。生きている間の全ての努力と成果は自分のためになされているわけだから、自分の死とともに生きていたことの全てが無に帰す。どんなに金持ちになろうが、どんなに権力を得ようが、自分の死と共にすべてが消失する。みっとも無い、情けない、見苦しい極致だ。個人主義なんて言うのはクソみたいなものだ。

自分の人生や今の時代にだけ目を向けていると、こんなことになってっちゃう。こんなクソみたいな価値観に浸って、家族のために、仲間のために、社会のために、国のためを命をかけて力を尽くすことはばかっているとしてきたのが戦後の日本だ。

歴史的継続性の中に自分を見出し、「今俺が為す行為は将来において意義を持つ」と信じれば、歴史の流れの中での自分の存在と行為が戦略性を帯びる。そして、今すぐではないが、未来において「今、俺が行動することで、目的は必ず達成される」と楽観的に考えることが出来る。

グローバリズムの衰退とともに、これからの世界の潮流になるであろう「人類学的集団主義」で考えれば、このような考えが当然になる。また、古くて新しい社会思想である「自然調和主義」から見れば、絶対的個人という考えがあるはずもなく、人はみな全宇宙、地球自然環境、自分の生きている国土や風土の中に在るとするのが自然だ。

「俺は荒谷家の一員だ」「俺は熊野飛鳥本郷集落の人間だ」「俺は日本人だ」「俺は地球と宇宙の構成員だ」として生きてく。

日本の歴史の一員として、社会的集団性と歴史的継続性に帰属することで、個人では得られない「胆力」という力を身につけることが出来る。

頑張りやせ! 信頼する仲間のために。命を掛けようぜの日本人として。



テキサスの荒地を馬に乗って走った時。



特戦群の武士道にも「胆力」の重要性を掲げた。



共に戦える仲間、伊藤祐靖、稲川義貴と。